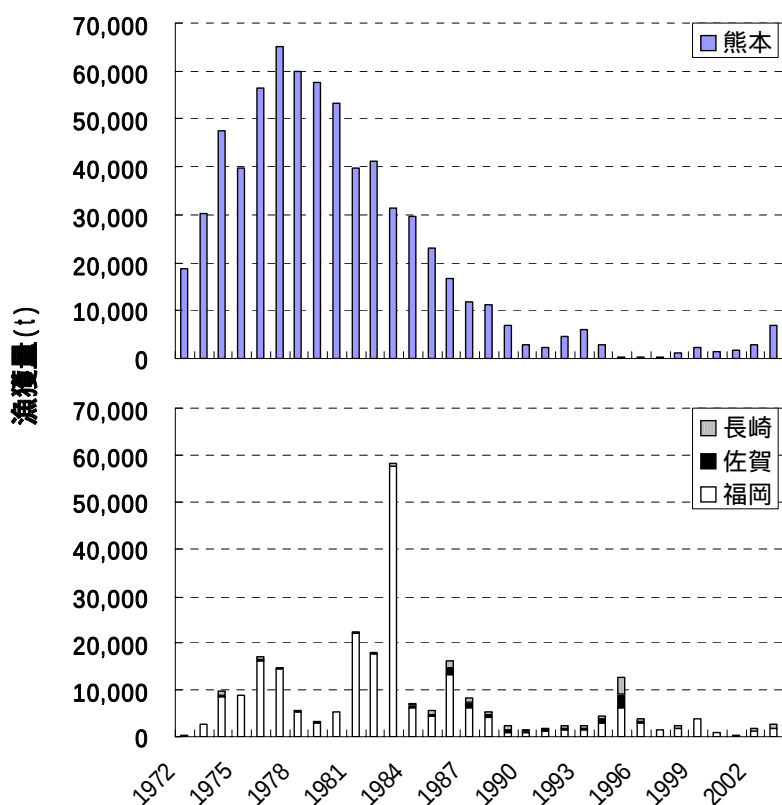


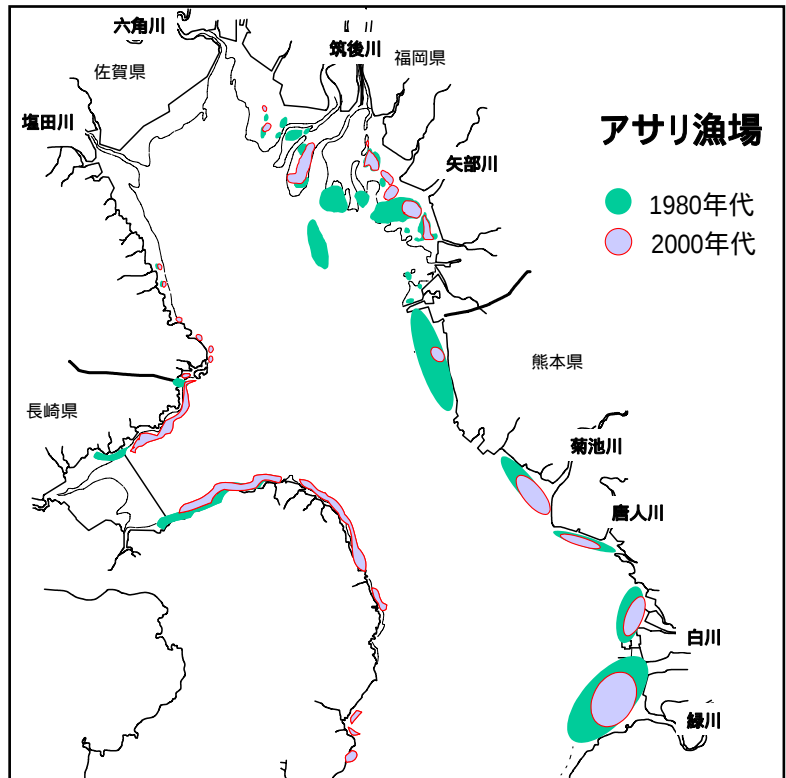
3) 有明海のアサリ

- ・熊本沿岸において、1977 年（昭和 52 年）に約 65,000t の漁獲があったが、その後は 2,000t 前後で推移してきたが、2003 年（平成 15 年）には約 7,000t となっている。（図 3.11.9 参照）
- ・1980 年代と 2000 年代で比較すると、漁場が岸に寄っており、また、筑後川河口域では漁場が縮小している。また、熊本県の主要漁場（荒尾地先・菊池川河口域・白川河口域・緑川河口域）においては、緑川河口域の漁獲量の激減が見られる。（図 3.11.10～図 3.11.12 参照）
- ・アサリの減少要因としては、漁場の縮小、大雨や猛暑等の環境要因による大量斃死、過剰漁獲、食害等が考えられる。



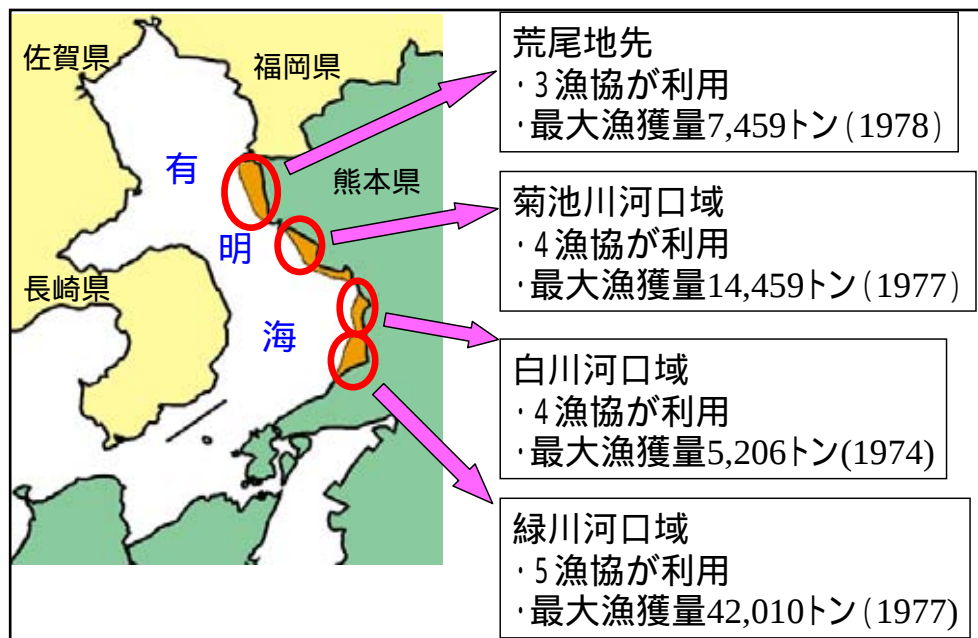
出典：「第 15 回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-3 有明海における二枚貝について”
[伊藤委員発表資料]

図 3.11.9 有明海における県別のアサリ漁獲量の推移



出典:「第15回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-3 有明海における二枚貝について”
[伊藤委員発表資料]

図 3.11.10 アサリの漁場：1980年代、2000年代



出典:「第15回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-3 有明海における二枚貝について”
[伊藤委員発表資料]

図 3.11.11 有明海熊本県沿岸の主要漁場

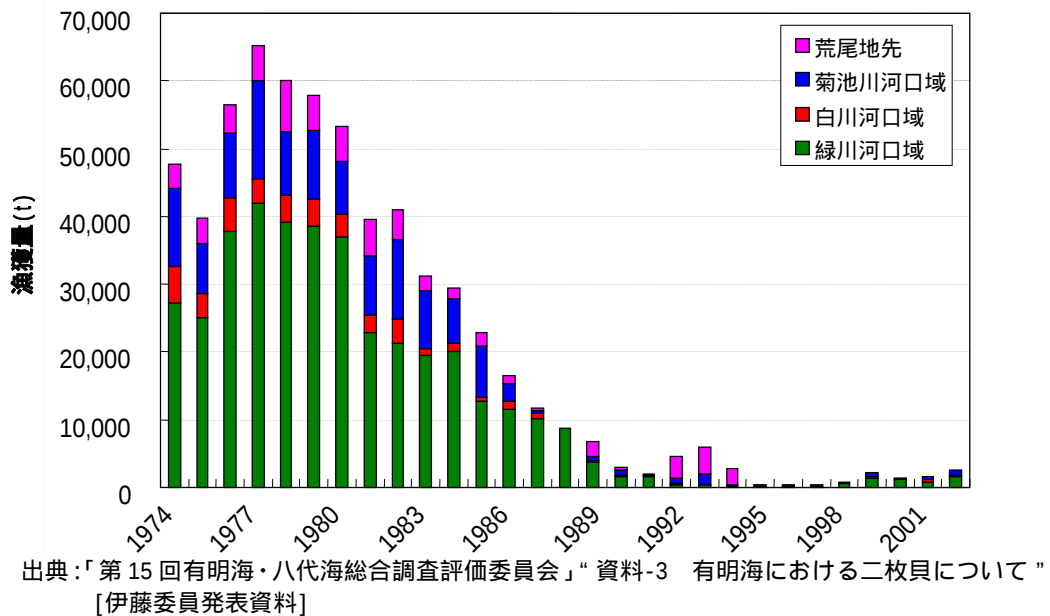


図 3.11.12 熊本県のアサリ漁獲量の推移

4) 有明海のタイラギ

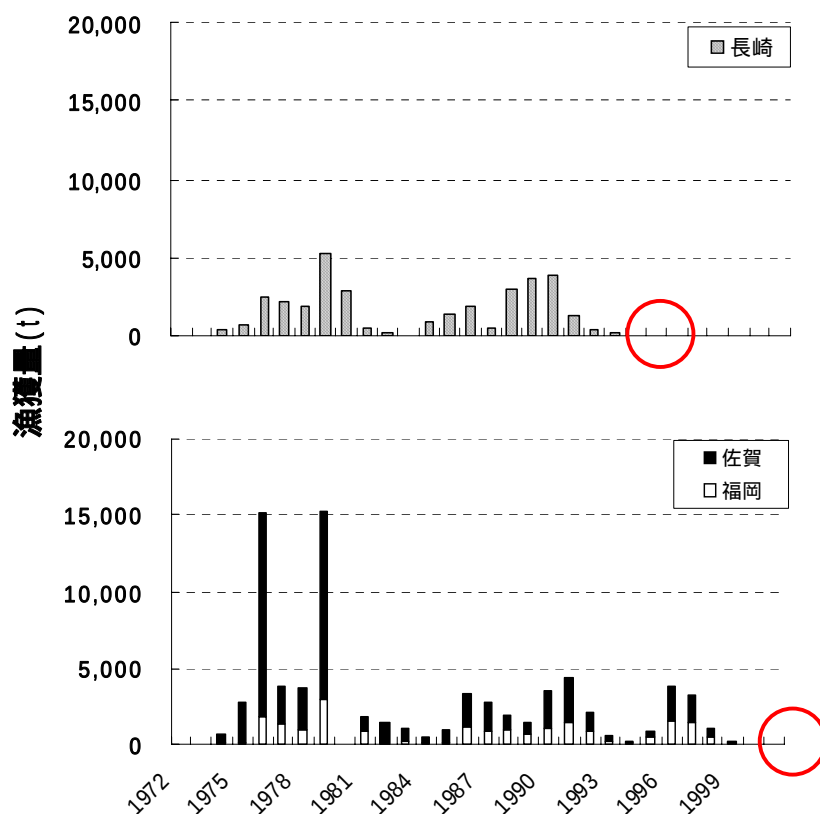
北東部海域（大浦漁協と大牟田を結んだライン以北の漁場）における長期的な資源の減少と近年得られている知見について以下にまとめる。

< 長期的な資源の減少について >

- ・福岡県、佐賀県及び長崎県のタイラギの漁獲量の推移より、タイラギの特徴としては、漁獲のピークが数年おきに起こっていたが、長崎県では1990年代にピークが見られなくなり、ほとんど漁獲されなくなった。福岡県、佐賀県を中心とした湾奥部では、2000年（平成12年）頃からピークが見られなくなり、ほとんど漁獲されなくなった。（図3.11.13、図3.11.14参照）
- ・大浦漁協資料によると、1970年代は貝柱漁獲量が1,500tを超えていたが、その後、300～400t前後で推移している。（図3.11.15参照）
- ・1976年（昭和51年）から1999年（平成11年）まで、佐賀県海域のタイラギ成貝の生息量を調査したところ、1990年（平成2年）前後を境に漁場が東側に偏ってきている。（図3.11.16参照）
- ・1989年（平成元年）と2000年（平成12年）の底質の調査結果によると、2000年（平成12年）にはMdφ7の部分で湾中央までに広がっており、底質の細粒化・泥化が進行していることが予測される。このような底質の変化が、漁場の縮小の原因になっていることが推測される。（図3.11.17参照）

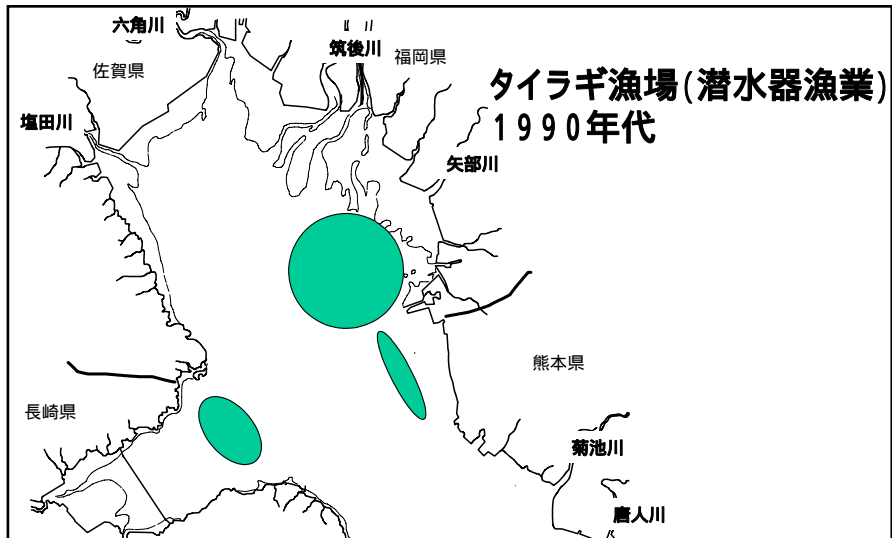
< 近年の知見 >

- ・ 2003 年（平成 15 年）から浮遊幼生と着底稚貝の分布域を調査し、1981 年（昭和 56 年）と比較したところ、浮遊幼生はこの間中西部に広く分布しているが、着底稚貝の漁場は東側に偏っている。このため、着底後に斃死した可能性が高く、底質が生残に関与しているものと思われる。（図 3.11.18 参照）
- ・ 成貝の大量斃死は、着底から約 1 年後の 5 月頃から大きさに関係なく発生する。着底 3 ヶ月後には活力が低下する、干潟域では大量斃死は発生しない、鰓や腎臓にウィルス様粒子が確認されるなどの知見が得られているが、原因は不明である（貧酸素は主因ではない）。
- ・ 成貝の消失について、4～11 月に成貝が突然消失し、海底にバラバラの殻と窪みが散在する。ナルトビエイによる食害が主な原因とされている。



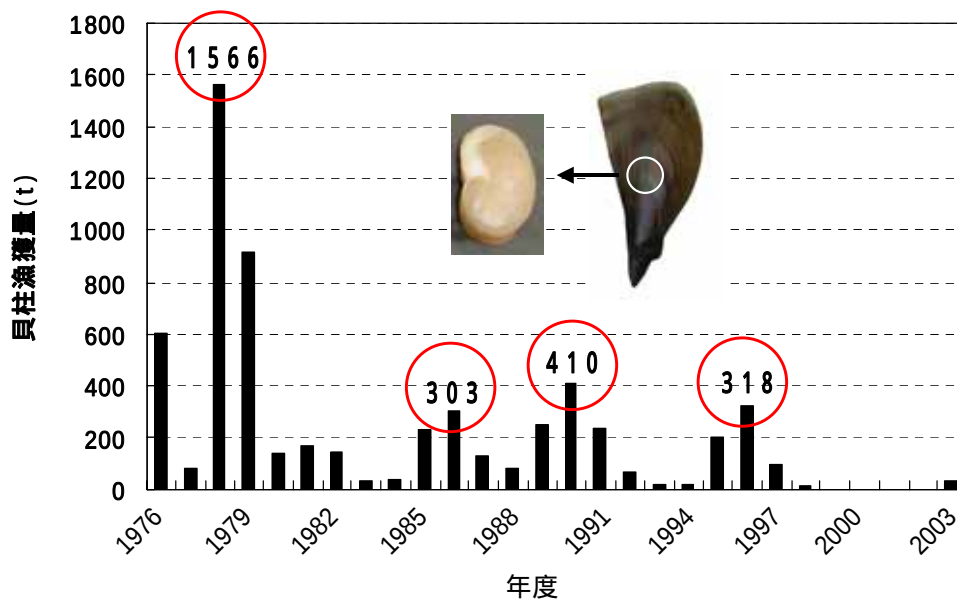
出典：「第 15 回有明海・八代海総合調査評価委員会」資料-3 有明海における二枚貝について
[伊藤委員発表資料]

図 3.11.13 有明海における県別のタイラギ漁獲量の推移



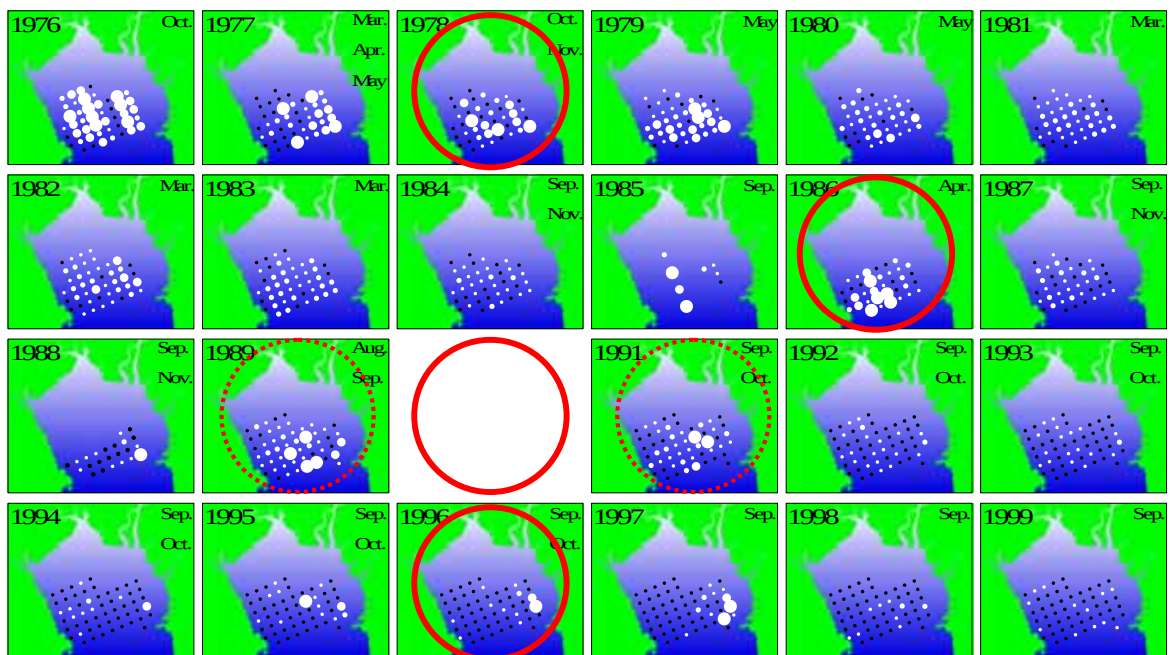
出典:「第15回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-3 有明海における二枚貝について”
[伊藤委員発表資料]

図 3.11.14 タイラギの漁場：1990 年代



出典:「第15回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-3 有明海における二枚貝について”
[伊藤委員発表資料]

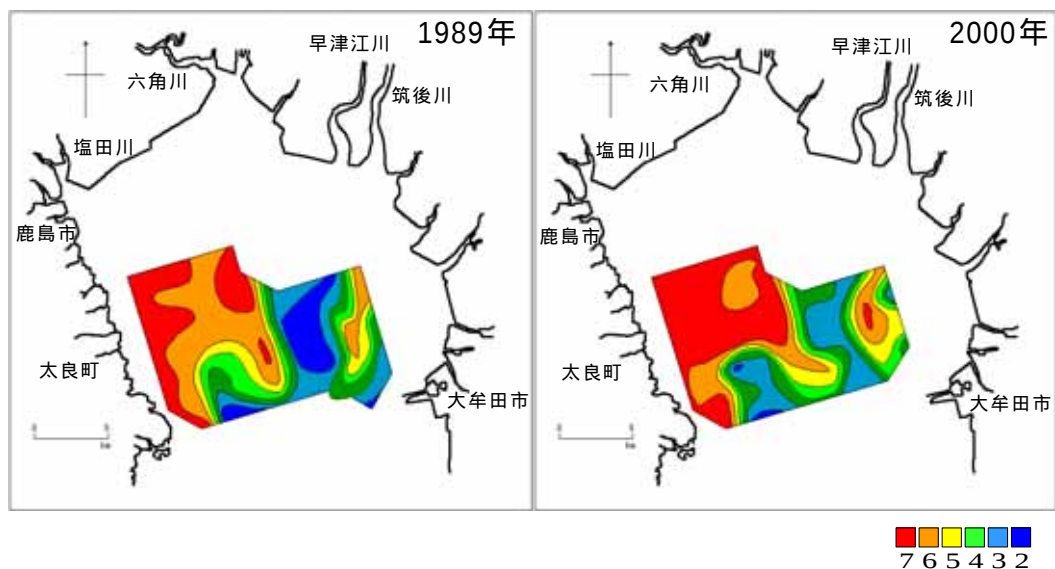
図 3.11.15 佐賀県大浦漁協のタイラギ貝柱漁獲の推移



○ 100ind / 100m² ◯ < 100 ◯ < 50 ◯ < 10 • = 0

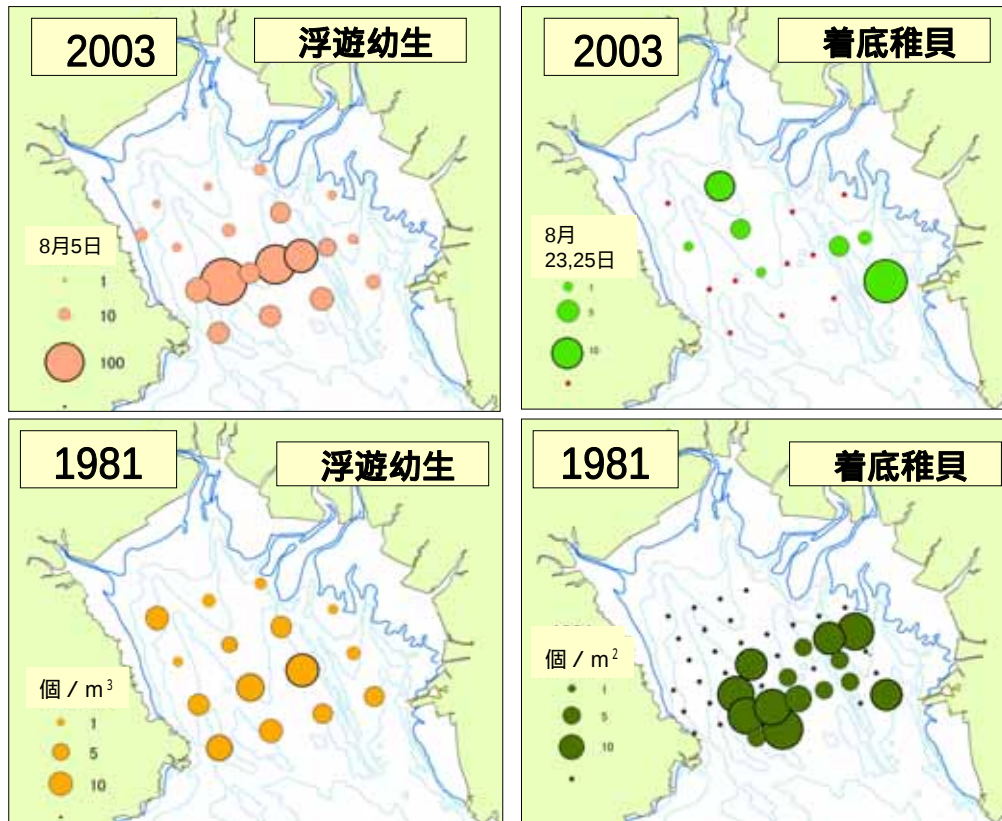
出典：「第15回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-3 有明海における二枚貝について”
[伊藤委員発表資料]

図 3.11.16 タイラギ生息量（成貝）の経年変化



出典：「第15回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-3 有明海における二枚貝について”
[伊藤委員発表資料]

図 3.11.17 有明海北西部海域の中央粒径値（Mdφ）の水平分布



出典：「第15回有明海・八代海総合調査評価委員会」資料-3 有明海における二枚貝について
 [伊藤委員発表資料]

図 3.11.18 浮遊幼生の着底稚貝の分布域の比較

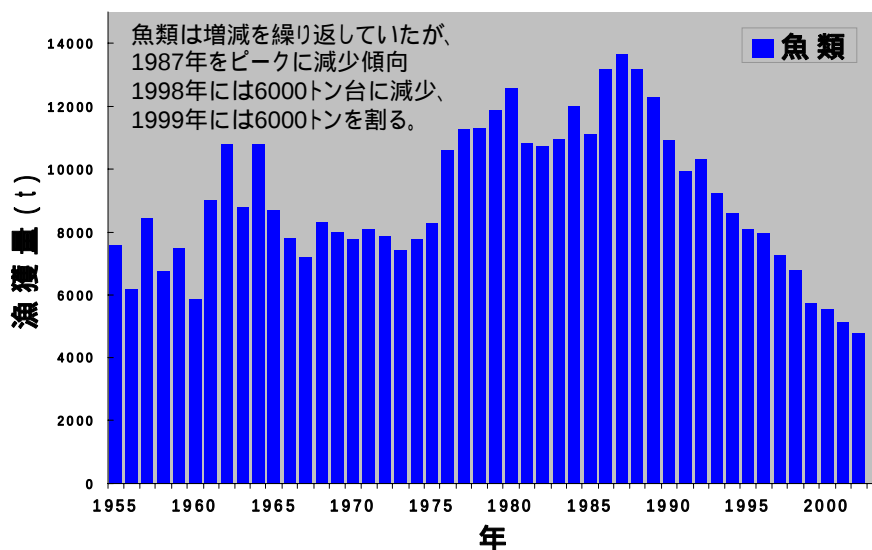
(3) 魚類

1) 有明海の特徴

- ・浅い水深、多くの流入河川と広大な干潟、高い生物生産性を有しており、干潟・河口域は稚仔魚の生育場所や特産種（魚類7種、浮遊生カイアシ類2種、ペントス14種、計23種）の生息場として重要である。
- ・有明海は生産性が高いだけでなく多様性も大きく、また、漁獲対象以外の種が多くを占める。
 - 内田・塚原（1955年）：全域74科147種
 - 鷲尾ら（1996年）：湾奥部56科119種
 - 山口ら（未発表）：中央部124種
 - 東京湾では干潟域で60種（加納ら,2000年） 南部海域で83種（奥井・清水,2002）

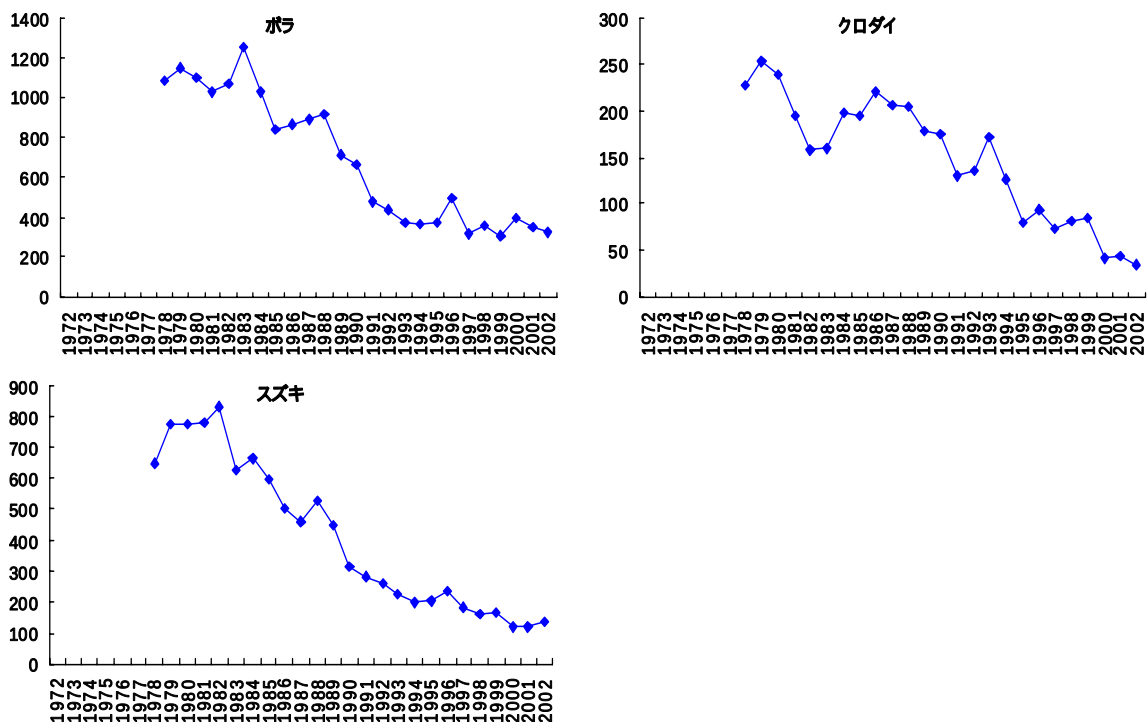
2) 有明海の魚類漁獲量等について

- ・有明海については、漁獲努力量等の資源評価にかかる情報が整備されていないが、漁獲量の動向を資源変動の目安と考えることができる。
- ・検討の基礎とした統計資料の性格上、個別の魚種の増減の詳細を論議することは避け、傾向としてまとめることとする。
- ・魚類の漁獲量は、1987年（昭和62年）をピーク（1万3千トン台）に減少傾向を示し、1999年（平成11年）には6千トンを割り込んでいる。（図 3.11.19参照）
- ・有明海における主要魚種の大半は底生種であり、そうした魚種の漁獲量の減少が続いている。
- ・ボラ、クロダイ、スズキは1985年（昭和60年）頃から徐々に減少傾向を示している。（図 3.11.20(1)参照）
- ・特にウシノシタ類、ヒラメ、ニベ・グチ類、カレイ類及びクルマエビについては、1990年代後半にそれまでの最低水準を明らかに下回って漁獲量が減少傾向にあると見ることができる。（図 3.11.20(2)、図 3.11.20(3)参照）



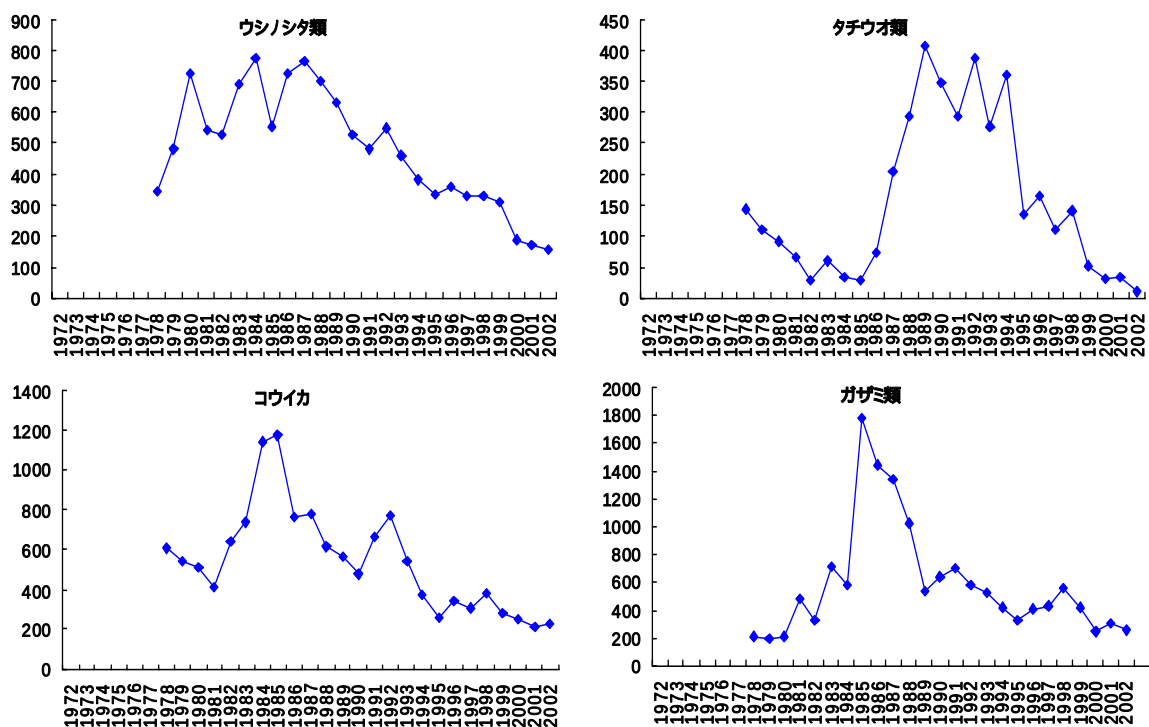
出典：「第17回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-2 水産資源に関するとりまとめ(2) 主に魚類資源について” [中田委員発表資料]

図 3.11.19 有明海における魚類漁獲量の経年変化



出典：「第17回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-2 水産資源に関するとりまとめ(2) 主に魚類資源について” [中田委員発表資料]

図 3.11.20(1) 特定魚介類の漁獲量の経年変化：ボラ、クロダイ、スズキ



出典：「第17回有明海・八代海総合調査評価委員会」“資料-2 水産資源に関するとりまとめ(2) 主に魚類資源について” [中田委員発表資料]

図 3.11.20(2) 特定魚介類の漁獲量の経年変化：
ウシノシタ類、タチウオ類、コウイカ、ガザミ類